＜大学の今＞

図書館における資料保存と研究者の責務

宇都宮 千穂

はじめに

2018年、高知県立大学が全国ニュースに取り上げられた。その記事は、「図書の焼却処分」を報じるもので、新図書館建設の過程で蔵書２万２千冊余を焼却処分したことを批判する内容であった。

これに対し同年８月、学長は会見を開き、以下の謝罪文をHPに掲載した[1)]。まず、「県民の皆様の知的財産である公立大学図書館の蔵書を管理する立場にある大学として、除却に際しての配慮が十分でなく、多数の図書を焼却するに至ったこと」について詫び、除却の理由を次のように述べている。①新図書館は集いスペースやグループ学習室、座席数を増やし、大学図書館の機能を充実させた。旧図書館より広さは1.5倍となったが、蔵書の収蔵能力を旧図書館同様に保つためには3.8万冊を処分せざるを得なかった。②処分にあたっては慎重に選定を行い、破損・重複・補修不能、保存不要の本を選定した。よって、除却自体に問題はないが、「県内公立図書館や大学図書館や県民に広く知らせ、活用の道を探ることをしなかったこと」は問題だった、とした。そして、ほどなく学内では、驚くべき提案が大学執行部から教員に示された。それは、「本学教員が県内中学校に出向き、本の大切さを説く授業を行う」というものであった。

この謝罪とその後の提案について、筆者の所属する学部では異論が噴出した。問題の本質は「県民の資産を無断で焼いた」ことではなく、図書館施設のあり方と除却そのものに問題があることを認識していたからである。

１．大学図書館のあるべき姿

今回の図書館問題の根底にあるのは、限られた広さの大学図書館において「蔵書の充実」よりも「交流のための」場所の確保を優先する思考回路である。実際、本学図書館では、図書館が新しくなり広くなったにもかかわらず、蔵書数や書架数はほとんど増えていない。それどころか、新図書館への移行時に雄松堂「府県統計書集成」全巻とマイクロフィルムリーダー、高知女子大時代から収集してきたとみられる女性学関係のマイクロフィッシュもロッカーごと処分してしまった[2)]。先の謝罪文では「大学図書館の機能を充実させた」とあるが、本当にそうなのかと疑問を感じる。確かに、本学だけでなく一般的に図書館は、予算の削減や司書の配置、広さの問題等多くの課題を抱えている。しかし、だからこそ「大学図書館の機能充実とは何か」について正面から論じ、大学は何をすべきかを考える必要がある。

大学図書館にとって必要な機能とは、集いスペースではなく、まずは学術に必要な資料収集ができることのはずだ。だが、蔵書数も少なく、データベースも使えない、雑誌の購入も次々と打ち切るような現在の図書館は、そのような役割を果たしているとはいえない。

２．「除却」問題への当事者責任

研究者にとって文献や資料は、重要な研究材料である。オンラインで資料を閲覧することができる時代になったが、現物がどこかで保存されているからこそ研究者は安心して研究ができる。だが、その一方で、図書館では年々資料が増え続け、蔵書を処分しているのも事実である。もちろん、それは明確な判断基準や方法に基づいている。高知県立大学の除却が問題だったのは、判断基準や方法が曖昧であった上に、処分数の数値目標を達成するために流れ作業で除却が進められたからである。その結果、貴重図書まで処分してしまったのだ[3)]。

それにしても、なぜ、誰も止められなかったのか。誤解を恐れずに、そして自戒を込めて言えば、原因は、資料価値を判断する教員にもあったと思う。本来であれば、図書館資料の保存・管理は図書館の仕事であるが、小さな地方大学の図書館の現状をみれば、資料価値を知る教員は、資料保存の最後の砦としての役割を果たすべきだった。そのような考えに至ったのは、以下に挙げる筆者の経験による。

筆者が着任した2015年、すでに書籍の除却作業が始まっていた。膨大な書籍リストが送られ、専門分野に即して除却すべき本を選ぶというものであった。司書も私も、おそらく学部教員の誰もが納得い

かないまま、リスト片手に図書館の本を確認しながら選別作業を行った。その後、除却図書は倉庫に集められ、そこから文化学部教員は、3000冊以上を学生研究室などに自力で「救出」した。

その過程で筆者が気になったのが、書庫にあった大量の社史であった。小さな図書館に不釣り合いな量だったが、2019年、とある集会で高知短期大学の元教員が「社史は残っているだろうか」と発言したことで、その存在理由が明らかとなった。あの膨大な社史は、彼が長年にわたって私費を投じながら集めたコレクションだったのだ。社史は集めるのが難しく、高知という僻地にこれだけのコレクションがある意味は大きかったはずだ。さらに、そこには会社パンフレットのようなものも多くあった。それは、社史が発行できないような会社の資料だったかもしれない。であれば、なおさら重要な資料になり得たはずである。小さな図書館だからこそ、特徴あるコレクションには意味があった。それがわかっていながら、なぜ、それは貴重だから捨てるなと言わなかったのか。職業研究者としての責務が果たせなかったことに、後悔ばかりが募っている。

3．資料保存の価値と研究者の責任

だが、研究者であれば皆、資料を保存すべきと思っているかというと、必ずしもそうではない。資料保存に対する考え方には、文理の違いや研究手法、研究対象によって大きく異なる。分断があると言ってもよいほどだ。

論文や資料は、データーベースを契約すれば最新のものが手に入る世の中である。各図書館での資料保存に意義を感じなくて当然である。だが、筆者のような過去のものから学んだ経験がある研究者は、過去の資料を捨て去る自信と勇気はない。もちろん全て残すべきとはいわないが、何を残すかについての議論は必要だし、資料を軽視するような研究者が廃棄を判断すべきではない。

目線を大学図書館から一般社会に広げてみると、やはり資料保存は難しい局面にある。高齢化や過疎が進む高知県では、集落や家、学校、地域産業の記録資料が失われている。これらの資料は、一見すると何の価値もないゴミに見えるが、地域社会の過去と未来をつなぐ可能性がある。これらを救い出す取り組みが県内では地道に進められているが、この意義が広く理解されることは簡単なことではない。

こうしてみると、やはり図書館運営や資料保存に関する議論には、専門研究者が積極的に加わり、発言をし続けるしかない。研究者は、文献資料がなければ研究できない。よって、文献や資料の価値を具体的に示し、広く理解してもらわなければならない。そしてそれらは学術的な価値だけではなく、地域の人にとっても価値あるものだと実感してもらえれば、資料保存のための施設建設にも理解が得られるだろう。そうしなければ、図書館どころか人間社会から資料は失われてしまう。それはとても恐ろしいことだ。

おわりに　～今後の展望～

図書館問題を考えていくなかで、2019年度後半から学部教員による「文化資源研究プロジェクト」が始まった。これは、文献や資料紹介、資料保存に関する研究会を通して、研究者を含め広く資料保存への理解を深めていく活動である。筆者は、このなかで「一人ひとりの記憶をまちの記憶にするプロジェクト」に携わっている。これは、NPO法人アテラーノ旭まちあるき部会[4]とともに、区画整理で大きく変わる都市空間の記憶を残す取り組みである。主な活動は、地域住民の思い出を聞き取り、それを都市空間に重ね合わせて記録するものだが、大切なのは聞き取りデータの保存である。どのように保存すべきか、県内で同様の活動を行っている歴史資料保存団体と協力・連携し[5]、適切な保存方法を探っている。

燃やした資料は戻らない。しかし、同じ過ちは繰り返さない。今は、私たち研究者が「研究を通してどのように資料保存に貢献できるのか」を、明確に意識しながら続けていくしかないと考えている。

【注】

1）高知県立大学総合情報センター (https://www.u-kochi.ac.jp/soshiki/7/oshirase.html)2020/04/06閲覧

2）その後、これらの資料とリーダーは、文化学部教員有志と司書の協力によって「救出」された。しかし、廃棄処分扱いのためOPAC等での検索対象とはならない。

3）「萬葉集古義」（1922 ～ 36 年）、「自由民権運動研究文献目録」（1984 年）、「日本植生誌」（1982 年）等、他館に保存がない資料が焼却された。
4）NPO 法人アテラーノ旭とは、高知市旭で「まちのお茶の間」を開いている団体である。宅配弁当や地域の高齢者の生活支援を行うほか、行政と連携しながら地域づくりを担っている。
5）高知県立高知城歴史博物館による地域資料の保存・調査事業のほか、県内研究者や当事者、新聞記者で構成される「高知戦争資料保存ネットワーク」「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」がある。

（高知県立大学）